

慈悲始終なし

三 明 智 彰

一

『歎異抄』第四条（『定本親鸞聖人全集』第四卷言行篇八頁以下、親全四・言行一八と記す。）に、「この慈悲始終なし」という言葉がある。これは、従来多く、人間の慈悲が首尾一貫しないこと、徹底しないことと解釈されてきた。しかし、この言葉は、ただ人間の慈悲を否定するものではなく、たとえ有限であっても、尽きることがなく止め置くことができないう人間の慈悲を示すものではないか。そうであればこそ、最終段落の「しかれば、念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさふらうべき」との言葉が、深い大慈悲の表現と受け取られるのである。

今回、『歎異抄』第四条の「慈悲始終なし」ということについて、新たな解釈の可能性を提起したいと思う。

二

『歎異抄』第四条は、慈悲の実践問題について述べられている。

仏教といえば、慈悲の問題に触れないものはあり得ない。特に、親鸞の場合は、

大慈悲はこれ仏道の正因なるがゆえに、……（中略）……安樂淨土はこの大悲より生ぜるが故なればなり。故にこの大悲を謂て淨土の根とす。（『教行信証』「真仏土巻」、曇鸞『淨土論註』「性功德」の文、親全一―二五―二、原漢文）

と、真の淨土の根源が、大慈悲であることを明示し、また、

仏は是れ満足大悲の人（『教行信証』「信巻」、善導『觀經疏』「散善義」、親全一―一〇四、原漢文）と顯している。

大慈悲は、仏陀の心であり、凡夫・声聞・縁覚の小・中の慈悲とは区別される。しかし、だからといって凡夫とは全く関係がないというわけではない。われわれ凡夫にも慈悲の心が動く時はある。その凡夫の慈悲と仏の大慈悲とはどのような

に関わるのか。

『歎異抄』第四条には、まず、慈悲について、「聖道・浄土のかはりめ」があるとされ、聖道の慈悲と浄土の慈悲とが述べられている。仏教とは、慈悲を根本とするのであるから、仏教に聖道門・浄土門があるならば、慈悲にも、聖道門の慈悲と浄土門の慈悲があるのである。

その聖道門の慈悲については、「聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。」（親全四・言行一八）とし、浄土門の慈悲については、「浄土の慈悲といふは、念仏していそぎ仏になりて、大慈大悲心をもて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。」（同上）としている。

そこで、まず取り上げたいのは、この「かはりめ」とは、何かということである。従来、「聖道・浄土の違い」と解釈されてきた。それは、昭和六年以来多くの読者を得てきた岩波文庫本（金子大栄校訂）の影響があることを思う。それには、

また、浄土の慈悲といふは（岩波文庫『歎異抄』四一頁）

と、蓮如本や永正本など古写本にはない、「また、」の字が、『真宗法要本』（江戸期・西本願寺刊）によって補われているのである。これにより、「かはりめ」は相違点とされ、聖道の慈悲と浄土の慈悲を対比し、違い目を際立たせる説明が行わ

れてきたのではないか。

この「かはりめ」を、違い目ではなく、変わっていく目・転換点と解釈したのが、廣瀬杲氏である。（昭和四十九年三月十日、高倉会館における講演。廣瀬杲『歎異抄講話』法蔵館・第二巻二〇八～二六頁等、参照）この解釈によって、聖道の慈悲と浄土の慈悲の違いを優劣論的に検討するのではなく、慈悲心の歩みとして、聖道の慈悲から浄土の慈悲へとという転換の道筋があることが提示された。

では、聖道の慈悲から、浄土の慈悲への転換点とは何か。それは、「おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし」という痛みと共なる自覚である。それに応答する教えとして、浄土の慈悲が示されるのである。

慈悲心を果たし遂げることの困難性への覚醒において、浄土の慈悲に出遇つて行くということがまさしく、聖道浄土の変わり目ということである。

三

『歎異抄』第四条には、浄土の慈悲を示された後、それを承けて、

今生に、いかに、いとをし不便とおもふとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。（親全四・言行一八）との言葉が続くのである。「この慈悲始終なし」とは、どのよ

うな意味であろうか。「今生に、いかに、いとをし不便とおもふとも」といわれているわれら人間の抱く慈悲に始終がないということであるが、「始終なし」とはいかなることかを新たに考えたいのである。

「始終」とは、「首尾、始め終わり」、「常に、いつも」、「初めから終わりまで全体」などの意味がある。これらの中から、従来は、首尾一貫しない。不徹底であると解釈されてきた。これは、「今生に、いかに、いとをし不便とおもふとも」助け難し。また、前にさかのぼって「おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。」ということから一応意味が通るものである。

しかし、再応考えてみれば、首尾一貫しない慈悲、不徹底な慈悲だからといって、放棄することができるのだろうか。われわれは、慈悲が有限であつても、あきらめきれないこともあるのである。「それでも何とかできないか」と。まさしく「この慈悲始終なし」である。「始終なし」とは、始めも終わりもない、すなわち無始無終という意味ではないか。たとえば、『往生要集』に、

有情輪廻して六道に生ずること、なお車輪の始終なきが如し。『往生要集』第二欣求淨土、第六引接結緣樂、真聖全一・七六五〇とある。この「なお車輪の始終なきが如し」の「始終なし」とは、車輪の循環するように尽きることがない、止まること

がないという意味である。『往生要集』をよく知っていた親鸞が、尽きることがない、果てることがないという意味で「始終なし」と言つた可能性は十分あり得る。

また、親鸞は、

恩愛はなはだちがたく生死はなはだつきがたし

念仏三昧行じてぞ 罪障を滅し度脱せし『高僧和讃』『龍樹讃』

第十首・親全二・和讃一八〇

と、詠んでいる。断ち切ることができない人間の慈悲を見ていたのである。断ち切り難く、尽き難い恩愛の痛みにおいて、念仏の法に出遇う。それは、『歎異抄』第四条の、「この慈悲始終なし」から、

しかれば、念仏まうすのみぞ、すえとをりたる大慈悲心にてさうらふべき

に展開するのと軌を一にするのである。尽きることがない、止むことがないという、仏陀ならぬ人間の尽きせぬ慈悲が表されているのではないか。それゆえにこそ、「しかれば、念仏まうすのみぞ、すえとほりたる大慈悲心にてさうらうべき」(親全四・言行一八)という言葉が、ますます、ただこのことひとつの道としてうなずかしめられるのである。

親鸞は、慈悲の実践という課題を終生忘れなかった。『正像末和讃』には、

無慚無愧のこの身にて まことのころはなけれども

慈悲始終なし（三 明）

弥陀の回向の御名なれば 功德は十方にみちたまふ（『悲嘆述

懐和讃』第四首・親全二・和讃―二〇九）

小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ

如来の願船いままさずば 苦海をいかでかわたるべき（『悲嘆述

懐和讃』第五首・親全二・和讃―二一〇）

とある。また、『高僧和讃』には、

南無阿弥陀仏をとけるには 衆善海水のごとくなり

かの清浄の善身にえたり ひとしく衆生に回向せん（親全二・

和讃―一二八）

とあるのである。

教え子に対しても、

念仏を御こころにいれてつねにまふして、念仏そしらんひとび

と、この世のちの世までのことを、いのりあはせたまふべくさふ

らふ。……（中略）……ただ、ひがふたる世のひとびとをいのり、

弥陀の御ちかひにいれとおぼしめしあはゞ、仏の御恩を報じまひ

らせたまふになりさふらふべし。……（中略）……聖人の廿五日

の御念仏も、詮ずるところは、かやふの邪見のものをたすけん料

にこそ、まふしあはせたまへとまふすことにてさふらへば、よく

よく、念仏そしらんひとをたすかれとおぼしめして、念仏しあは

せたまふべくさふらふ。（性信宛・親鸞聖人御消息集第八通・親

全三・書簡―一五二）

と述べて、慈悲の実践としての念仏の心を示している。

そのような慈悲の実践に反する我執の問題が、『疑惑和讃』

に示されている。

仏智不思議をうたがいて 善本徳本たのむひと

辺地懈慢にむまるれば 大慈大悲はえざりけり（親全二・和讃

―一九二）

七宝の宮殿にむまれては 五百歳のとしをとしをへて

三宝を見聞せざるゆへ 有情利益はさらになし（同―一九四）

とは、慈悲を喪失した疑心の情況である。

四

親鸞における念仏とは、人間の慈悲を頭から否定するので

なく、慈悲を果たし遂げることのできない人間の痛みを、十

分知り、受け止め、それに応える大慈悲心の働きである。

そのような念仏を親鸞が実践したことが、『歎異抄』第四

条の「この慈悲始終なし」の考察から明確にされるのである。

（キーワード） 慈悲、『歎異抄』第四条、親鸞、始終

（愛知新城大谷大学、教授）

states:

The person who lives true shinjin, however, abides in the stage of the truly settled, for he has already been grasped, never to be abandoned. There is no need to wait in anticipation for the moment of death, no need to rely on Amida's coming. At the time shinjin becomes settled, birth too becomes settled (*Letters of Shinran*, Hongwanji International Center, 1978: 20)

Shinran emphasizes that there is no need to rely on Amida's coming at the moment of death. In this passage we can find that Shinran made clear the truth of salvation in the present life. This change of salvation's time — from the moment of death to the present life — is Shinran's idea of the change of time.

39. The Criticism of Faith in the Chapter on the Transformed Buddha-Bodies and Lands: With reference to the Chapter of Non-Meditative Practice in the *Commentary on the Contemplation Sūtra*

Eshin Itō

This essay intends to discuss the subject of the criticism of faith through Shan-tao's treatment in the "Chapter of Non-meditative Practice" which Shinran quoted in the "Chapter of the Transformed Buddha-Bodies and Lands" of the *Kyōgyōshinshō*. Hereby, I want to investigate the characteristic or the difference of faith of all creatures that Shinran clarified in the "Chapter of the Transformed Buddha-Bodies and Lands."

40. On Compassion in the Fourth Passage of the *Tannishō*

Toshiaki MIHARU

The Japanese phrase, *Kono jihi shijūnashi* in the fourth passage of the *Tannishō*, has been understood to mean that our compassion is not through-going. But in my opinion it means that it is endless. *Tannishō* collects Shinran's sayings. By reading this book, we understand that Shinran is a man of compassion.

41. The Lotus Sutra and Dōgen

Eryū KAWAGUCHI

42. *Shōbōgenzō hokketenhokke* and *Rongi*

Takao ISHIJIMA

In the “*Shōbōgenzō hokketenhokke*” (正法眼藏, 法華転法華) we find the expression “*yokuryō shujō kai ji go nyū*” (欲令衆生, 開示悟入). It has been thought that Dōgen (道元) quotes this expression from the “*Hokekyō hōben-bon*” (法華經方便品). However, I wondered about this, and investigated a number of sources. As a result, I believe that Dōgen (道元) quoted this expression from the *Shoulengyan yishuzhu jing* (首楞嚴義疏注經) of Zixuan (子璿).

43. Nichiren Shōnin's Propagation of the *Lotus Sutra* through his Writings

Gyōkai SEKIDO

Nichiren's attitude was to vigorously promote his ideas. Focusing on engaging in as much communication as he could with his followers, he was a prolific letter writer, thus producing a great volume of writings. A collection of about 280 of his authenticated works are contained in the volume *The Complete Works of Nichiren Shōnin*, co-authored by Dr. Hoyo Watanabe and Dr. Hosho Komatsu. This volume is upheld as the standard for present-day research on Nichiren Shōnin. There are about 260 works in the collection that are classified as letters, although some of these are quite lengthy and could be considered as treatises or theses. My purpose for this presentation is to try to classify these letters by purpose and subject.

44. On the Disclosure of the Core Transmission Teachings of the Taiseki-ji School Found in Nichikan's Writings

Mikio MATSUOKA